

連体修飾構造の談話機能に関する一考察

加藤 陽子

【要旨】

本稿は、「投打にわたる活躍で数々の伝説を生み出している大谷翔平投手。」のように、非制限的用法の連体修飾節を伴い主名詞で終わる文（本稿では「非制限的連体修飾止め」と呼ぶ）の談話機能を明らかにすることを目的とする。この非制限的連体修飾止めにおいては、主名詞が直後の文の主題を表すことがあり、非制限的連体修飾止めと直後の文との連文で新しい主題を非明示的に文脈に導入する機能を果たす場合があることを述べた。

【キーワード】

連体修飾節の非制限的用法、体言止め、談話機能

1 はじめに

新聞や雑誌の記事、テレビのニュースなどには、以下の（１）～（２）のような、連体修飾節（下線部）を伴った体言（粹囲み）で終了する文に出会うことがしばしばある。（１）は大谷翔平選手の活躍を伝えるインターネットサイトの記事の冒頭に現れた例、（２）は急逝した歌手西城秀樹氏の功績を讃える「西城秀樹さん 『ザ・ベストテン』“唯一の満点”の凄さとは」という記事の最終段落に現れた例である。

（１）投打にわたる活躍で数々の伝説を生み出している大谷翔平投手。打者としては今季6本塁打を記録し、18日（日本時間19日）本拠地レイズ戦前のフリー打撃では513フィート（約156メートル）の衝撃弾を放つ圧巻のパワーを披露。7月のオールスター戦のホームランダービー出場の待望論が米国で沸騰している。

（Full-Coun 編集部 2018.5.22 配信）<https://full-count.jp/2018/05/22/post131352/2/> 2018.5.22 閲覧

（２）絶妙な総合チャートを作り、視聴者をテレビに釘付けさせた『ザ・ベストテン』。他の誰も通り抜けられなかった難関を乗り越えた西城秀樹さんは、まさに国民的スターだったのだ。

（News ポストセブン 2018.5.22 配信）

https://www.news-postseven.com/archives/20180522_679448.html 2018.5.22 閲覧

本稿は新聞や雑誌の記事、ニュース原稿、ルポルタージュやドキュメンタリー番組のナレーション部分など、主に書き言葉を主体にしたテキストに現れるこのような文を分析の対象とし、文章・談話におけるその機能（以降、まとめて「談話機能」）を考察することを目的とする。

2 連体修飾節の制限的用法と非制限的用法

連体修飾節が主名詞の指示物を限定する機能を持つか否かという観点から、連体修飾節を2つに分類できることはよく知られている。分類の一方は、「赤い帽子をかぶった少女が私の妹だ。」の下線部¹のようなもので、制限的用法と呼ばれるものである。これは、主名詞が指しうる複数なもの（この場合は「少女」）の中から「赤い帽子をかぶった」という性質により特定されるものだけを限定する修飾の仕方である。主名詞は不定であるため、連体修飾節が表現されない場合（* ϕ 少女が私の妹だ）は、指示対象を一つに絞り込むことができず、非文となる。

他方、上記のような限定の機能がない非制限的用法と呼ばれるものがある。これは、「赤い帽子をかぶった長女の写真を撮った。」「県の公式行事に参加された天皇陛下は、公用車で帰途につかれた。」の下線部のようなものである。この用法においては、連体修飾節は主名詞の限定のためではなく、主名詞の情報を内容的に付加するために使用されていると説明される。この用法では、連体修飾節は主名詞の特定にはかかわらないため、それが表現されない場合（ ϕ 長女の写真を撮った。/ ϕ 天皇陛下は、公用車で帰途につかれた。）も問題なく文が成立する。

本稿で取り上げるのは後者の、非制限的用法の連体修飾構造で、かつ主名詞で終わるもの（これ以降、本稿で取り上げるこの文法構造を便宜上「非制限的連体修飾止め」と略記）である。なお、制限的用法と非制限的用法を分ける基準については、本稿では「主名詞がすでに特定されている」ことを基準とする。この「すでに特定されている」というのは、主名詞が「長野県松本市」や「平野歩夢選手」などの固有名詞の場合、また、「地球」「太陽」などの唯一無二の存在を表す一般名詞の場合、「私」「あなた」などの「今・ここ」で同定可能な名詞などの場合である。本稿では、述語を含みこれらの主名詞を修飾する部分を非制限的用法の連体修飾節構造とする。

3 先行研究

本稿で考察の対象とするのは、非制限的用法の連体修飾節を伴った体言で終わる文である。部分的にこれに言及した研究はあっても、これを直接研究対象とし深く多方面から考察した先行研究は管見の限りでは見つけることができなかった。そのため、関連する分野

の研究を順に概観していきたい。

3-1 非制限的連体修飾節に関する先行研究

益岡 (1995) は、非制限的な連体修飾節について、①主節の事態に対する情報付加、②主名詞に対する情報付加という2つの観点から考察を行っている。本稿で考察する非制限的連体修飾止めは、主節がなく主名詞のみで終わっている形式であるため、より重要な②の観点に注目すると、これについては、「名詞を文脈に導入するに当たって必要となる予備的、背景的情報を連体節によって与える (p.142)」と述べられている。この、主名詞を円滑に文脈に持ち込むために連体修飾節の情報を使うという談話上の機能に着目している点は、非常に示唆的である。

また、山田 (2004) は益岡 (1995) を踏まえ、なぜ非制限的な連体修飾節が使用されるかについて、それを使用しない複文などの形式と比較しながら考察している。山田 (2004) は、その動機として、表現上の冗長性を回避し、よりコンパクトな表現を実現するという文レベルの理由を挙げている。この構文的な理由も興味深いものであるが、さらに示唆的なのは山田 (2004) が挙げている「談話的要因」である。山田 (2004) は、修飾節で示されていることながら「背景化」という働きを担っており、それにより描写にメリハリが付き主となる筋が明確になることを示している。さらに山田 (2005) でも、「主筋の浮き立て方 (p.22)」という表現で、談話における情報の「背景化」という非制限的な連体修飾節の機能が説明されている。談話の進行上、主な筋と背景化された脇の筋を表現し分けることは、効果的な伝達のために重要である。本稿ではこの「連体修飾節で描写された内容を主筋から外す」という談話機能の指摘は非常に示唆に富むと考える。

3-2 体言止めに関する先行研究

本稿で扱う非制限的連体修飾止めは、南 (1993) の分類では、述部を含まない「独立語文」の中の「提示文」に相当すると思われる。これは、客観的なものごとについての情報を伝えることを主とするもので、「題目文」と「表示文」に下位分類されるものである。このうち、「題目文」は「ある談話の、ある単位的部分の主題、要旨などを示すもの」とされており、以下のような例が挙げられている。

シバシバウサギ小屋ナドトイワレル住宅事情ノ改善ト、環境問題ノ解決。経済大国トイワレナガラ、マダマダ多クノ問題ヲカカエテイル日本ニトッテ、コノ2ツハナカデモ緊急度ノ高イモノトイワナケレバナリマセン。… (南 1993: 69)

本稿の非制限的連体修飾止めは、「非制限的」な「連体修飾構造」で文が終わっている形式であるという点で上記の南 (1993) の例とは若干異なるが、後続文の主題を名詞の形

で提示するという点で共通した働きがある。談話における非制限的連体修飾止めの機能を追究する本研究にとっては非常に示唆的である。

以上の先行研究から、非制限的連体修飾節には連体修飾節で表された情報を背景化し、相対的に主筋を前景化しながら主名詞を談話に導入する機能があり、体言止めには後続文の主題を提示する働きがあることがわかった。本稿の非制限的連体修飾止めも双方の性質を引き継いでいることが予想される。では以下で、データを基に談話における非制限的連体修飾止めの機能を考察してみたい。

4 データ

非制限的連体修飾止めは主に書き言葉の文章、ニュースや報道番組のナレーション部分に現れる。文章の資料としては新聞記事やインターネット上にある記事を使用した。また、ニュース、報道番組などの音声を伴ったものについては、書き起こしたり、インターネット上に掲載されている文字スクリプトを使用したりした。データ数はまだ非常に少ないが、これらの資料から約 50 の非制限的連体修飾止めを抽出し、分析した。

5 考察

実例の分析から、非制限的連体修飾止めは、主名詞が (A) 直後の文の主題であるもの、(B) 直後の文の主題でないもの、の二つに分けられることがわかった。本稿ではこのうち (A) のみに焦点を当てて分析する。これは先にあげた例 (1)、および以下の例 (3) (4) のようなものである。

(3) 曲作りに「壁」を感じ、悩んでいたアーティストの家入レオさん。松任谷由実さんの言葉に勇気づけられ、前へ踏み出せました。

(朝日新聞夕刊 2018.7.19 上記引用箇所は1面の紙面紹介の部分全文で、見出しは「松任谷由実さんの言葉 5面」)

(4) 家族3人そろっての夕食は高校に入学しても続いた。時々、親に反抗したつもりで、本屋に寄り道をして帰ったり、遅い時間に帰宅するようになる和子さん。彼女は、若々しい母親と友達のようにショッピングに出かけている同級生を見かけると、高齢の母と出歩くのが恥ずかしくなることもあった。

(Suits-woman.jp 2018.5.19 配信 見出しは“【勤続10年女子】「私は所詮脇役人生…」引っ込み思案だった自分にサヨナラ！高齢両親を支える一人っ子の目覚め”)

<https://suits-woman.jp/kenjitsunews/77456/> 2018.5.19 閲覧

例(3)の2文目は主題がなく省略されている(三上1960の「略題」)。しかし、1文目である非制限的連体修飾止めの主名詞の「家入レオさん」を2文目の主題として「家入レオさんは松任谷由実さんの言葉に勇気づけられ、前へ踏み出せました。」のように解釈できる。一方、例(4)では、主名詞「和子さん」が直後の文で「彼女」という代名詞で指示されており、主名詞が主題を表している。両例とも、主題が直後の文に引き継がれているものである。特に例(3)のような文章では、直後の文(2文目)に主題はないものの、通常文頭に位置する主題が1文目(非制限的連体修飾止め)の最後尾に来て実質的に文頭に主題を抱く形となり、スムーズに主題が連続する文章の流れとなっている。

それでは、次にこのような主名詞で直後の文の主題を表す非制限的連体修飾止めが、談話の中でどのような機能を果たすことがあるか、一つの例を見ていきたい。

以下の例(5)は、1999年のサッカー五輪代表を率いたトルシエ監督と日本代表の選手たちを追ったドキュメンタリー番組から採録したものである。本例では、トルシエ監督が試合が行われるグラウンドの性質に気づき、“どんな作戦が有効か”という監督の心の声を直接表出した形で表現された疑問と、“セットプレーが決め手だ”という解答の間に挟まれた位置に非制限的連体修飾止めが出現している。この非制限的連体修飾止めのナレーションが流れている画面では、トルシエ監督が中田選手に付きっきりでキックの練習をさせている様子が映し出されている。

(5) 日本、初戦の舞台はカザフスタンのアルマトイです。

前日の練習で、トルシエは、思った以上にグラウンドのデコボコが大きいのに気付きました。

こうしたグラウンドではどのような戦い方が有効なのか。

イタリア一部リーグでプレーする **中田英寿選手**。強豪相手のこの最終予選から代表チームに加わりました。

荒れたグラウンドではセットプレーが決め手になる。トルシエは中田の正確なキックに賭けようとしていました。

(NHKスペシャル「トルシエと若きイレブン～サッカー五輪代表・ロッカールームの真実～」1999年放送)

ここで非制限的連体修飾止めが果たしているのは、新たな登場人物である主名詞(中田英寿選手)そのものの背景化であると考えられる。先行文脈では、波線部のようにトルシエ監督を主題にして描写がなされている。続く「こうしたグラウンドではどのような戦い方が有効なのか。」という一文もトルシエ監督の心の声を直接表出した形のナレーションである。しかし、そこに「中田選手」という新たな登場人物が導入されている。もしここ

で中田選手を新たな主題として明示的に取り上げ、「中田英寿選手はイタリア一部リーグでプレーしています。強豪相手のこの最終予選から代表チームに加わりました。」のように主題として明確な立場を与えると、今までの主題（トルシエ監督）から主題が移ることになり、注意の焦点が逸れてしまう。それを避けるため、あくまで中田選手に主題が移ったことを明確にしないで叙述が行われるのだと思われる。

これは、談話における非明示的な主題導入のあり方であるということができよう。一般に主題を表す言語的な形式としては「～は」「～なら」等が挙げられる。「～は」や「～なら」などの明示的な標識によらない主題導入のこの形式は、書き言葉の談話特有の主題導入の形式と言えるかもしれない。直後の文の主題になるものを非制限的連体修飾止めの主名詞に置き、かつ直後の文を略題にするという連文の形式で、主題であることを明示せず、新たな主題を談話の中に持ち込むのである。

このような主題導入の方法をとる動機は、山田 (2005) で指摘された主筋を浮き立たせるという非制限的用法の使用動機と重なるところがある。ただし、山田 (2004) では、「背景化」されるのは、修飾節で示されている情報であり、本節で論じた「連文（非制限的連体修飾止めと後続文）の主題を非明示的にする」という操作ではない。しかし、ある情報を背景化することによって別の情報が前景化され、描写にめりはりが付き、主となる筋が明確になるという点で、山田 (2004, 2005) の観察と本稿での観察は共通している。例(5)で観察された非明示的な主題の導入は、さながらトルシエ監督が主役の舞台上、脇役という立場を印象付けながら中田選手という新たな登場人物を投入するという舞台演出の方法である。このような、主役と脇役の立場を固定したまま文脈に新たな登場人物を導入する方法によって、談話において何が前景化されるべきもので何が背景なのかという点が明らかになる。非制限的連体修飾止めはこのような談話機能を持つと捉えられる。

5 おわりに

以上、本稿では、新聞や雑誌の記事、テレビのニュースなどに現れる、非制限的用法の連体修飾節を伴った体言で終了する文（非制限的連体修飾止め）を対象に、その談話における機能を考察した。非制限的連体修飾止めは主名詞で直後に続く文の主題を表す場合があること、談話の中でそれが書き言葉に特有の主題導入の表現となることを指摘した。しかし、主名詞で後続文の主題を表示すること以外の非制限的連体修飾止めの働きや、談話上の他の機能については触れることができなかった。今後はデータを量・質ともに充実させ、一層詳細に研究を進めていきたい。

注

- 1 本稿では、連体修飾節には下線を引き、それが修飾する名詞を枠で囲む。また、この被修飾名詞を「主名詞」と呼び、連体修飾節と主名詞を合わせた表現（例えば「赤い帽子をかぶった長女」）を「連体修飾構造」と呼ぶこととする。

参考文献

- 大島資生 (1995) 「『は』と連体修飾節構造」 『日本語の主題と取り立て』 くろしお出版 pp.109-138
- 益岡隆志 (1995) 「連体節の表現と主名詞の主題性」 『日本語の主題と取り立て』 くろしお出版 pp.139-153
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』 くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 山田敏弘 (2004) 「非限定的名詞修飾の機能」 『岐阜大学国語国文学』 第31巻 岐阜大学教育学部 pp.1-13
- 山田敏弘 (2005) 「国語における名詞修飾表現」 『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 第53巻2号 岐阜大学 pp.11-23